

サッカーワールドカップと政治

社会B班：上田 隆司 小林 直樹
倉本 龍 谷 若菜

1. はじめに

ワールドカップは、四年に一度開催される世界最大のサッカーの大会である。世界の各大陸から予選を勝ち抜いてきた国が本戦へと進み世界一を決める。

そもそも、ワールドカップは第三代 FIFA 会長のジュール・リメが発案したものである。その目的はサッカーが一番強い国を決めたいという純粋なものであった。1930年にウルグアイにて第一回大会が開催されてから途中に2度の中止があったものの2012年の南アフリカ大会までで計19回開催されている。そして2014年に第20回大会、ブラジル大会が開催されることが決まっている¹。

今回ワールドカップをテーマに課題研究をしようと思ったのは、多くの人に興味を持ってもらいやすいのではないのかと思ったからである。サッカーは世界最大級の競技人口を誇るスポーツであり、ワールドカップのシーズンは日本でも盛んにテレビ中継が行われる。

まずワールドカップについて、その長所や短所についてインターネットと書籍で調べた。その上で19回行われた大会を3つの時期に分けた。すなわち第二次世界大戦中、戦後から冷戦の時期、そして現代である。3つに時代に分けた理由は、戦時中、戦後の冷戦期、現代でそれぞれ異なった長所や短所があるのではないかと考えたためである。取り上げた3つの時期の大会にはいくつかの問題点が見つかったが、それらの問題には共通して政治的思惑が潜んでいるのではないかと考えた。

2. 調査内容

(1) 第二次世界大戦

まず、第一の時期として、第二次世界大戦の時代である。第一次世界大戦が終結してしばらくすると、敗戦国であるイタリアやドイツを中心にファシズムが勢力を拡大し始めた。イタリアのファシスト党、ドイツのナチズム、日本の軍国主義などである。

1934年に開かれたワールドカップイタリア大会は、ムッソリーニが率いるファシスト党の統治下で開かれた大会であり、ムッソリーニが自らの権限を誇示する、ファシズム宣伝の場として利用した大会であった。ムッソリーニは前回大会準優勝国であるアルゼンチン代表をはじめとした、多くの外国人選手を帰化させた。そのため帰化選手がイタリア代

¹ 千田 善 『ワールドカップの世界史』 みすず書房 2006年
21～25項

表の大半を占めていた。帰化させた選手が代表の大半を占めることで、イタリアを勝たせようとしたのである。さらに、審判の買収を行った。それにより、審判がイタリアに有利な判定をし、これらによりイタリアはこの大会で優勝することができた²。

(2) 冷戦期

第二次世界大戦後、アメリカを中心とした西側諸国と、ソ連を中心とした東側諸国との対立があった。この対立は、軍事力による直接対決は起こらなかったため冷戦と呼ばれ、1945年～1989年まで44年間続いた。この時期に、ソ連は民主化運動の起こった東欧諸国に軍事介入している。介入された国は軍事力では勝てないので、スポーツで復讐することとなった。特にサッカーは国民的関心事として、政府も無視することのできない社会現象にまで発展した。東欧諸国ではサッカーの試合で、ソ連戦の場合はほとんどの国民が注目し、得点を入れると爆竹などで祝砲をあげた。敗れた場合はソ連の政治が悪いからサッカーで負けたのだなどという自然発生的デモが起こり、反政府運動に発展することがあるほどでした。この反政府運動のひとつに1956年のハンガリー動乱といわれるものがある。これを鎮めるためにもソ連は軍事介入を行い、10000人以上の死者を出すこととなった³。このように、サッカーがファシズムの宣伝の場や軍事介入されたことに対する復讐に利用されており、政治と密接していることがわかる。

(3) 冷戦後

長かった冷戦が終わると、共産主義諸国の発展に陰りが見え、ソ連が崩壊した。そして、冷戦の流れの中で世界各国を仲間に引き入れようとしたアメリカの元、インターネットが普及したり、世界貿易機関(WTO)によって自由貿易が推進され、世界はグローバル化へと進み始めた。

2002年日韓共催大会はそのような時代背景のもと開催された。スポーツ大会での二国共催は極めて少なく、ヨーロッパのサッカー選手権での二国共催の前例はあるもののオランダとベルギーという陸続きの二国であった。そのため海を隔てた日本と韓国による共催は前例のないものとなった。この大会が二国間の精神的な距離を縮めた。

しかし問題もあった。それは名称問題であるが、その原因は100年以上前に遡る。19世紀に西洋が東アジアに進出して以来、日本や中国は近代化したものの朝鮮は依然遅れていた。そんな朝鮮を近代化すべく半ば強引に保護国化した日本であったが、元総理大臣・韓国統監(朝鮮のトップ)であった伊藤博文が朝鮮人の安重根に殺害されたのを機に、1910年韓国を併合した。併合下で朝鮮の人々は名前を日本風に変えさせられ、日本語を強制させられた。またスポーツの世界大会で日本代表としての出場になるなど民族のアイデンティティを押さえつけられた。戦後、1965年に日韓基本条約が結ばれ、表面的に両国の国交は正常化した。

² 千田 前掲書 32～36 頁

³ 千田 前掲書 51～61 頁

一方では課題が残り、それが先に挙げた名称問題である。まず正式名称決定の際、英語では日本の頭文字はJ、韓国はKで本来日本が先に来るところを、韓国側が良しとせず韓国/日本(フランス語では韓国の頭文字はCとなる)に変更させた⁴。その上日本が国内向けに販売するチケットの大会名表記を「日本/韓国」の順にしようとしたところ、またも韓国側が反発し国名無表記になるということも起きた。⁵

3. 結論

これまでに記したようにワールドカップと政治とは、何らかの繋がりがあると考えられる。では、その繋がりがどのような目的で存在するのかを見ていきたい。

初めにムッソリーニの政策から見る。これは、ワールドカップに優勝することでイタリアの強さとファシズムの正しさの証明のためである。しかしこれによりワールドカップとしては、各国に憤りを感じさせるものとなった。

次にハンガリー、チェコスロバキアとソ連との代理戦争について考える。当時ハンガリー、チェコスロバキアや他の欧米諸国にはソ連の支配下にあるものが数多く存在した。中でもこの二か国はワールドカップという大衆の面前でソ連を倒すことでソ連からの支配脱却を目論んだ。そのためこれらの国が試合するときなどは、両国のサポーターの振る舞いは、争いそのものであり大会自体にも大きな悪影響をもたらした。

最後に日韓共催ワールドカップについてみていく。これは、大会自体には大きな影響を及ぼしたものではないが表記問題では大会運営内部で揉めることで問題となった。また韓国による審判買収問題やそれに伴う誤審問題などもあり、これは大会に悪影響を与えた。

以上のことを踏まえて考えると、それぞれ理由は、政治的地位の確立、自国状況の改善、自国の権力の誇示と様々であるが、これらの国は、すべてワールドカップを政治的に利用しようと考えていると見ることができる⁶。

つまりワールドカップを純粋に楽しもうと思う国もあるだろうがそこに政治的な利用価値を見出してそのように動いていく国も少なからず存在するものなのだ。

よってワールドカップと政治とは、国という媒体を通して繋がりを持っているのである。

今回表立って取り上げた事例は三つだが今後他の事例も調べてより詳しく政治との繋がりを示していきたい。そしていつか政治などの柵が無くなったワールドカップが実

⁴ 近内尚子・安保宏子・水野剛也「日本の全国紙における国名表記順序についての一分析 『朝日新聞』による「韓日」表記(2001～2005)を中心に(後編)」文教大学情報学部『情報研究』2006年 237項

⁵ 近内・安保・水野 前掲論文 238項

⁶ 加藤大仁「政治、権力とスポーツ―「スポーツと政治」研究のための一考察」慶応義塾大学『体育研究紀要』42(1) 2003年 19項

現してほしいものである。

4. 参考文献

- ・千田 善『ワールドカップの世界史』みすず書房、2006年
- ・近内尚子ほか「日本の全国紙における国名表記順序についての一分析 『朝日新聞』による「韓日」表記(2001～2005)を中心に(後編)」文教大学情報学部『情報研究』2006年
- ・加藤大仁「政治、権力とスポーツ―「スポーツと政治」研究のための一考察」慶応義塾大学『体育研究紀要』42(1)、2003年